

長屋門特有の建築的特徴

長屋門の扉の両脇には、部屋が設けられている。東の部屋は、品物や備蓄品を保管するために使われた。土間になっていることから、ここの収納品が頻繁に使用された様子がうかがえる。西側には、門番が駐在した小さな部屋がある。門番の部屋の奥には、小さな収納庫がある。ここは木製の上げ床であることから、食品や貴重品の収納に使われた可能性が示唆される。

長屋門は、ツガ、クリ、スギ、ケヤキの4種類の木でできている。江戸時代（1603～1867年）の日本社会では、下層階級がケヤキの木を利用することは禁じられていた。門扉はすべてケヤキでできており、高山家の富と地位を示している。扉の隣に一番奥に留められた祈祷札（お守りの護符）一式のうち一番下にあったものは、将軍徳川綱吉（1646～1709年）が統治した時代にまで遡る。

門の上にある金属細工は、ハートの柄に見えるように切られている。実際には、これはイノシシの目を表し（日本語で猪目として知られる）、悪魔を寄せつけないと言われている。また、山火事が発生したとき、猪は真っ先に森から逃げるので、この模様は火事除けになると信じられた。